

実習生・保育士・養成校教員の認識調査結果を 活かした現任保育者研修

Course content for the Nursery teacher trainers utilizing the results
of awareness surveys of trainees, nursery teachers,
and training school teachers.

今村麻子*, 村上 涼**, 鈴木健史***, 江村綾野****

概 要

本研究は、保育園の実習担当者向けの研修内容について検討したものである。これまでに行った実習生・保育士・養成校教員の認識調査の結果を活かした研修内容の構築を試みた。実習の好事例の傾向や実例、改善事例の三者の認識のずれの内容を示すことにより、三者の連携の重要性を伝えることをねらいとした。研修実施そのものを認識のずれを埋める機会と捉え、養成校や実習生の現状を伝える内容とした。研修のおわりには、各園の考えを活かしながら「実習受け入れマニュアル」の作成を勧めるものとした。

【キーワード】 保育実習 (Practical Childcare Training), 実習指導 (Practical training guidance), 保育実習担当者研修 (Course for the Nursery teacher trainers)

1. はじめに

保育士養成において保育実習の重要性とその実習を指導する担当保育者の役割の重要性が改めて注目されている。実習の充実が保育士養成の充実に繋がり、その後の保育の質の向上に繋がるものと考えられる。また、若者のキャリアを育む支援策の一環としても注目したい。学校と社会のなだらかな繋がりとなるよい実習とは何か、よりよい実習の実践のために何ができるのかということを考えたい。若者のキャリアのスタート期を大切にすることを養成校教員と実習受け入れ園がともに考える機会を作りたい。保育所にとっても人材の確保、質の向上は大きな課題であり、保育を学ぶ学生が保育を仕事に

選ぶか否かのきっかけのひとつとなっている実習の重要性は伝えていきたいところである。

今回、A市が行う「保育実習担当者研修」の講師を務めることとなり、研修を通して伝えるべきことを検討したいと考えた。

2. 背景

保育人材の不足

出生数は減少している一方、女性の就労率の向上の影響もあり、保育所のニーズは首都圏周辺では現在大きくは低下していない。新規の保育園開設や幼稚園のこども園化などから保育士を求める現場の数は多い。従来、人手不足と言われてきた保育現場がさらに採用難に見舞われている状況である。保育士養成校に入学した学生で保育現場への就職を希望しない者もいる。また、職種を問わずの問題であるが、新規学卒者の就職後3年以内の離職率は3割を超える現

* 宇都宮共和大学子ども生活学部 准教授

** 江戸川大学子どもコミュニケーション学科 准教授

*** 東京立正短期大学現代コミュニケーション学科幼児教育専攻 准教授

**** 川村学園女子大学教育学部幼児教育学科 准教授

状である。4年制大学卒業のうち31%が、短大卒では41%が3年以内に離職している（厚生労働省、2021）。保育士の勤続年数も短い。現任保育者の経験年数を見ると、低い層の保育士が多く、8年未満の保育士が約半分を占める。養成校入学時の保育への志を維持することや保育現場入職後の新任、若手人材の離職を防ぐことは養成校と保育現場の課題となっている。

実習の役割と状況

保育実習は、国の保育実習実施基準によれば「保育の理念と実践の関係について習熟させることを目的とする」。養成校内の座学と実習先での実体験が往還的に行われることによって保育の学びが積みあがっていく。実習は保育学生の学びの中核にあるといえる。

また、実習は本格的な就業の前に職業の実際を知り、リアリティショックを防ぐことも期待される。

実習は当事者である実習生、実習園、養成校のお互いの連携の上で実践が可能となる授業である。しかし、この三者の連携はお互いに遠慮しながらのものであることは想像に難くない。養成校は実習園に実習の受け入れをお願いする立場である。また、実習園にとっては人材難の昨今、採用のために養成校や学生との縁を切らさないように気を遣われていると推察する。そのため、学生への指導や評価を厳しくできないという声も聞く。そして、実習生は養成校と実習園に評価される立場であり、見知らぬ場所へ行ってやりこなしてこなくてはならない実習期間中に実習園にのびのび本音を言ってこられる者はそういないだろう。そして養成校にとって、実習生は満足度を上げ退学防止に配慮をしなくてはならない相手である。本音が言いにくい関係であることは自明と言える。

このようなことから三者がお互いの考えを情報交換し、考えのずれについて理解し、実習生のよりよい学びのためにどうしたらよいかということを考えることは有益であると考えられる。

養成校と保育現場の連携について

村上・今村・鈴木らは、養成校と実習受け入

れ園の連携の形を探りながら、自主シンポジウムを開催し、保育実習の受け入れ園が持つ負担感を解消するための実習指導ガイドラインの作成などの提案を行っている（2019）。

村上は保育士への質問紙調査から、実習指導体制整備への期待、実習事後における養成校との連携の必要性、実習生を育てる意義と負担感、実習指導体制と実態の乖離、訪問指導の活用と実習指導者研修への期待、実習事前における養成校との連携の必要性等の因子を抽出した。実習指導未経験者は具体的内容がわからず負担感を強めていること、実習指導の研修やマニュアルが必要であることを指摘している（2020）。

「保育実習における保育士・実習生・養成校教員の認識のずれの可視化—インタビュー調査の分析から—」（村上・今村・鈴木・江村、2021）（以下「認識のずれの可視化」研究と表記する）においては、複雑な関係で見えにくくなっている三者の本音を明らかにして認識のずれの可視化を試みた。

自治体主催の保育実習園内担当者向け研修

これまでの研究結果から養成校と保育現場のより密な連携の強化が必要ということが言えるが、そのために具体的にどうすればよいかという課題が出てくる。その答えのひとつには養成校と保育所が共に語る場を増やすということを提案できる。

今回、A市内の保育所の実習担当者研修に連携の実践として取り組むこととした。残念ながら、コロナ禍のため、オンデマンドのオンライン講座という形になり、双方向のコミュニケーションをリアルタイムでとることはできなかったが、相互理解に資する情報提供に努めることとした。

担当者向け研修実施状況について

各養成校（指定保育士養成施設）の実習指導者（教員）に対しては全国保育士養成協議会が「実習指導者」としての認定を行うこととして「実習指導者認定講習」を実施している。

園内の実習担当者向けの研修については日本保育協会が実施している。内容を参照する。

保育実習指導者セミナー内容

- ・ 保育実習をめぐる諸課題
- ・ 保育現場における保育実習の意義
- ・ 保育実習指導の基本
- ・ 保育実習生とのかかわりの留意点
- ・ 保育者養成校との連携
- ・ 保育士の養成と保育実習
(日本保育協会HP研修事業)
- ・ 養成校との連携について触れるとともに、保育実習指導の基本として実習生の受け入れ体制について、保育所実習指導の内容と指導法(記録・評価・指導等)について、効果的な保育所実習指導の事例、養成校と保育所等の協働による職員の資質向上についてなどを盛り込んだ2日間で合計12時間の講座となっている。

背景について)

- ②実習前の養成校の指導について
 - ③実習日誌・記録について
 - ④指導案(計画)とその実践について
 - ⑤子どもの理解と援助(子ども観・実習観)について
 - ⑥評価について
 - ⑦実習の振り返り(反省会)について
- 事前アンケート記述欄には下記のような要素が含まれていた。(複数回答あり)
1. 学生(実習生)の学びや理解に繋がる指導について知りたい
 2. 評価や反省会の持ち方など園側の役割、期待されていることについて知りたい
 3. 養成校の指導内容や日誌の指導のポイントを知りたい
 4. 養成校と保育園の連携の方法を知りたい

3. A市保育園内実習担当者向け研修

研修の概要

- ・ 公立保育園・私立保育園共通実施。100園余。
- ・ 各園の実習指導担当者(園長・保育士等)
- ・ 約60分間の研修動画をオンライン講座(オンデマンドにより)園や自宅から視聴。
- ・ テキストは各自ダウンロードして利用
- ・ 約1ヶ月間URLが公開され視聴可能
- ・ 任意参加
- ・ 同テーマでは市内で初めての実施

事前アンケート

市役所経由で公立園の園長会に事前にアンケートを依頼し、全10園の集約結果を受け取った。アンケートは14項目の質問を示し、その中で興味のあるものはどれか、具体的にどんな内容に関心があるかを聞いたものである。以下に結果を示す。質問は「認識のずれの可視化」研究において三者にインタビューした項目を利用した。

事前アンケート結果

14項目のうち興味のあるものとして○がついていたのは下記の7点であった。

- ①事前の情報共有(事前連携・学生の現状や

4. 研修の構成

アンケート結果を受け、「認識のずれの可視化」研究の結果とその調査過程で得られた情報など利用できる素材が多くあることが確認できた。養成校から保育所へ知識を伝えるのではなく、それぞれの保育所において実習担当者を中心に実習指導の質の向上のサイクルが回り始めるような内容を構築したいと考えた。各論の具体的な方法を知りたいという要望もあることを把握しつつ、そのために現状と課題の共有が必要であると考え、次のように構成した。

第1部では実習の位置づけや実習生についての情報提供をし、第2部では「認識のずれの可視化」研究結果より好事例や改善事例の傾向を紹介し、それぞれの現場での状況と共通する課題や目標について考える内容とする。第3部では各保育園の「実習受け入れマニュアル」の作成検討を提案する。その中で実習受け入れへの課題や保育実習担当者の重要性についても紹介する。ワークを3回はさみ、できるだけ受講者が課題を考えながら参加できるような構成を考慮した。

研修タイトル「保育実習担当者研修—実習生の育ちのための園と養成校の連携に向けて—」

第1部 実習・実習生の現状

- ・往還的な学び
- ・【ワーク1】実習生に一番伝えたいことはなにか
- ・保育者をめざすに至ったプロセス
(学生のキャリアについての研究紹介)
- ・養成校で学ぶ必修科目
- ・子どもに触れた経験(抱っこ・おむつ替え)

第2部 園と養成校との連携による実習を目指して インタビュー調査から研究結果から

(調査「保育実習における保育士・実習生・養成校教員の認識のずれの可視化—インタビュー調査の分析から—」の紹介)

- ・実習の当事者が本音を言いにくい構造
- ・実習の当事者の本音をインタビュー
- ・インタビュー項目
- ・好事例の分析(共通認識の内容から)
- ・好事例のインタビューの紹介(動画)
- ①教員
 - ・訪問指導について
 - ・ふり返りについて
- ②実習生
 - ・1日のふり返りと翌日の目標
 - ・実習の意義について
 - ・日誌について
 - ・実習生にとっての訪問指導
- ③保育園の実習担当の保育士
 - ・養成校との情報交換(実習前)
 - ・養成校と園の関係
 - ・日誌
 - ・日誌の指導について
 - ・子ども理解を進める工夫
 - ・ふり返りについて
- ・【ワーク2】好事例 三者の語りを聞いた感想
- ・改善事例における「認識のずれ」①事前指導
- ・改善事例における「認識のずれ」②実習中の指導
- ・改善事例における「認識のずれ」③子ども理解
- ・改善事例における「共通認識」情報共有・訪問指導
- ・【ワーク3】認識のずれを感じることはあるか？
ずれを埋めるための提案やアイデア

第3部 課題と提案

- ・各保育園で「実習受け入れマニュアル」の検討を!
- ・実習に関するマニュアルについて
- ・実習園の「受け入れマニュアル」種類と参考
養成校からの依頼文等/業界団体作成のガイドライン/自治体作成のガイドライン
- ・実習受け入れマニュアル・手引きの内容の検討
- ・実習のずれを埋める(ずれのマトリックス)
- ・保育実習担当者の重要性

それぞれの部の主な内容と流れ、ねらいを示す。

第1部 実習・実習生の現状

学生の様子、養成校の現状等を紹介する。現在の学生について、学生が学んでいる内容、学びの過程、新しいカリキュラムの紹介をし、理解を促す。

保育者養成において、学内の授業と合わせて実習は学びの中心であること、往還的な学びの体系になっていることを伝える。「子どもたちの様子をたくさん見て持ち帰ってほしい。学校での勉強といずれ繋がるから。」という巡回先の園長の言葉を引用し、体験的な学びが長期間のサイクルの中で保育学生にとって財産になることを伝える。

学生が保育者をめざすに至ったプロセスを示したTEM図(今村, 2019)を示し、実習が分岐点として多く語られていることを紹介する。実習生がシステムで送られてくるひとかたまりではなく、ひとりひとり将来の道へのきっかけを持つ個別の存在であると感じてもらえるとよいと考える。実習生は実習先で人間関係を見ており、そこで自分が務まるだろうかと将来の仕事について考えているということを伝える。

資格取得のための必修科目一覧を示し、保育士独自の「乳児保育」や「子ども家庭支援論」などの授業に学生が興味を持って学んでいることを伝える。事前アンケートで「養成校では具体的にどのような指導をしているのか(指導内容、課題など)」という記入があった。実習指導の内容を知りたいという要望とも受け取れたが、初めての機会ある本研修では全体のカリキュラム構成の紹介をまず行うこととした。

また、実習に参加する前の学生がどのくらい乳児に触れた経験があるのか、抱っこやおむつ替えを経験した割合を紹介し、未経験も多いことを伝える。その上で、乳児に触れる経験が実習に期待されている点を伝える。実習生の、未熟でも知りたい意欲に応じて欲しいことや生身の存在と触れて経験する意義を大切に実習を進めてほしいと伝えるねらいがある。

ワーク1では実習担当者も実習の主体であることを意識してもらうために「実習生に一番伝えたいことはなにか」をそれぞれ考えてもらう時間とする。

好事例の分析（共通認識の内容から）

- ①**実習生の課題**：実習生の課題を共有することで、保育士と養成校教員は実習において重点的に指導する内容を決定している。個々の実習生の課題に応じて、柔軟に指導内容を変更することができる。
- ②**実習での学びのアセスメント**：訪問指導時や、実習後の振り返りの際に、実習生の学びのアセスメントを行い共有することで、実習指導のあり方や実習生の課題が達成できたかどうかの判断ができる。
- ③**実習生のメンタル面や負担感のケアの必要性**：実習生のメンタル面や実習への負担感への配慮の必要性を認識することでケアすることができる。
- ④**実習先の保育方針**：実習先の保育方針や方法に応じた実習準備をすることができる。基本的なマナーなどの修得は必須。
- ⑤**実習生が主体的な学び手となるための支援の重要性**：実習生の主体性を生かす指導のあり方が、実習生の学びへのモチベーションや自信につながる。
- ⑥**直接体験により多様な保育の視点を学ぶこと**：子どもとの関わりなど、直接体験により多様な保育の視点を学ぶことが実習の意義・目的である。
- ⑦**実習記録の意義と目的**：実習記録の意義と目的を共有することで、実習生が意欲的に取り組み、学びを深めることができる。
- ⑧**保育の省察による気づきと学びの促進**：保育の省察により、実習生が自己の課題や子どもの理解について気づきと学びが促進される。
- ⑨**保育者としての将来につながる実習**：実習は実習生にとって、後の職業選択や保育者としての自信につながることをふまえて指導を行う。
- ⑩**連携の重要性**：保育士と養成校教員、そして実習生が連携をし、情報共有を積極的に行うことの重要性を共有する。

図1. 研修スライド「好事例の分析（共通認識の内容から）」

第2部 園と養成校との連携による実習を目指して

インタビュー調査の研究結果から

研修に「認識のずれの可視化」研究結果を活かす箇所である。

保育士・実習生・養成校教員が本音を言いにくい構造であることを説明し、その三者へのインタビュー結果から実習指導のヒントを得てほしい旨を説明する。

11例中の9例が、当事者が「充実していた」と感じていた好事例であり、一方の2例が「充実していなかった」と感じていた改善事例である。実習生にとってだけでなく、当事者の三者にとっての充実度を見ている点も伝える。受講者には、自分の園はどちらなのかと考えながら聞いてもらうことになることと想像する。

【好事例の分析（共通認識の内容から）】

好事例の特徴を、三者の共通認識の内容からの分析結果で示す（図1）。このような実習を皆で実現していきたいという研修の結論とも言える内容である。

<好事例のインタビューの紹介（動画）>

好事例の特徴（図1）を理解しやすくするため、次に好事例の一組のインタビュー動画を見せる。実際の語りは受講者への説得力があると

も考える。

動画で紹介する好事例の中の実習生はそれまでの実習ではつまずきを感じていた学生であることを紹介する。この動画は実習を通して本人が手応えを感じている様子、言葉も豊富になっている点も見られると考える。

選んだインタビュー映像の中に、「実習の振り返りの意義」について、三者が共通に「保育士としての実践的学びと振り返り」「同僚性もとの肯定的フィードバック」を語っている部分がある。これは三者の共通認識として挙げられたものでもあり、実習の充実のために大きな要因と考えられる。また、図1に示した「⑧保育の省察による気づきと学びの促進」の具体例ともなる。

巡回指導での実習生と養成校教員のやりとりもそれぞれから語られた映像を入れたが、充実した実習であることが伝わる。これらは通常は保育園側から知ることのない部分であり、見えない部分を見せ、このような好事例の様子を知ってもらう意図もある。

また、養成校教員と実習園の二者間では、事前の養成に関する信頼関係、情報交換が有効であることが共通に語られている。これらは研修テーマに挙げた「実習生の育ちのための園と養

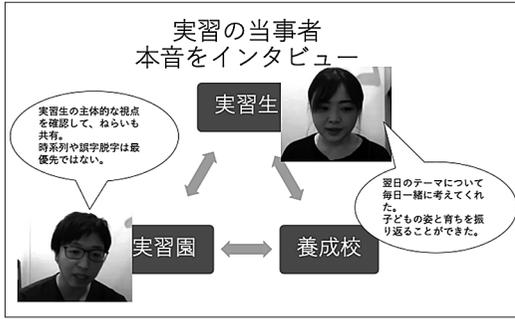


図2. 好事例を紹介する研修スライド

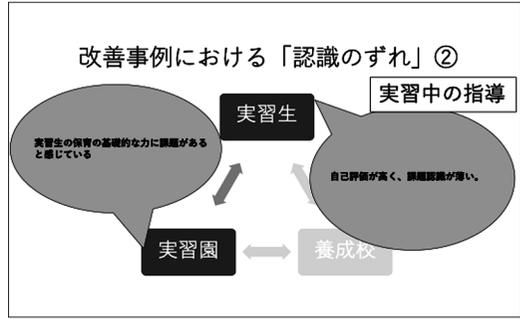


図3. 改善事例を紹介する研修スライド

成校の連携」の必要性を訴える教材となる。実習園の担当保育士からは、連携の重要性が語られるとともに、実習生の課題も知らせず実習に送ってくる園への疑問も語られる。受講者にとっては共感される部分と予想される。

保育園の保育士が実習日誌や子ども理解のための工夫した点について熱意をもって語り、実習生が「保育観が変わった」、「(保育を)頑張ってみたくと思った」とそれに呼応するような内容で、自身の変化を語る場面が見られる。「⑨保育者としての将来に繋がる実習」(図1)の実践例の紹介となる。

一連の動画を通して充実度の高い実習の実習園の指導担当者からは実習への熱意や工夫を学ぶことができると考える。

【改善事例における「認識のずれ」】

改善事例に見られた認識のずれがどのようなものであったのか、それぞれの語りと要点をスライドで紹介する。事例①では「事前指導」に関する養成校と実習園の間のずれを示す。養成校は「専門的知識と授業に力を入れて指導していた」が、実習園では「より基礎的な指導を期待していた」という内容である。事例②③では実習園と実習生の二者間のずれを示す。②では園が「実習生の保育の基礎的な力に課題があると感じている」一方で、実習生は「自己評価が高く、課題意識が薄い」というものである。③では、園は「実習生との対話を通じた子ども理解の指導を考えていた」が、実習生は「子どもとの関わりの中で自分なりの子ども理解が進んだ」と考えている。「認識のずれの可視化」研

究の協力者の中では改善事例は2例のみしか見られなかったが、実際にはこのような実習生との認識のずれに困っている園は多いと予想しており、受講者に共感される部分と考える。受講者である各園の実習担当者に、ずれは一般に起こっている共通の課題であると知らせた上で、そのずれを埋めるにはどうしたらよいか当事者として主体的に考えてもらうところが研修の目的のひとつである。

【改善事例における「共通認識」】

改善事例において共通認識として挙げられたのは「養成校と実習園の連携不足」であった。好事例の傾向に見られる「⑩連携の重要性」(図1)を反対側から補足するものとして示すことができる。

ワーク3では、実習生または養成校と認識のずれを感じることをあるかを訊ね、そのずれを埋めるための提案やアイデアを考えてもらう時間とする。「認識のずれの可視化」研究報告で養成校の改善策として挙げた例を示し、実習園側の改善について考えてもらう問いとした。

第3部 課題と提案

ずれの解決の直接の改善策ではないが、各園の考えを尊重しながらよりよい実習を行うための方策として園内で「実習受け入れマニュアル・手引き」を策定することを勧める。完成されたマニュアルの常備が求められるという意味ではなく、それぞれの園の人材育成の理念や方針に沿って、今現在の実習生を受け入れる対応や体制について園内で話し合ってもらいたい旨を伝

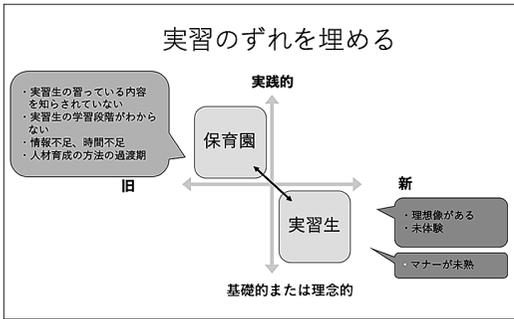


図4. 実習のずれを図式化した研修スライド

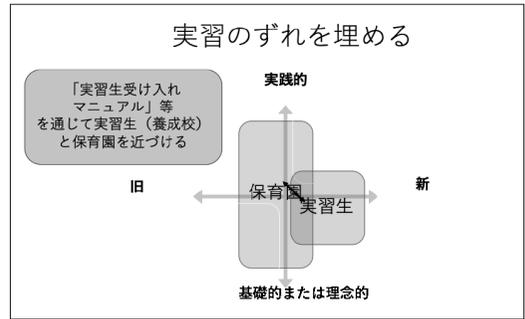


図5. マニュアル効果イメージの研修スライド

える。実習園が受け入れに備え、実習生の現状を知り、守備範囲を拡げることがずれを減らし、重なり面積を増やすことができると表現する(図4・図5)。参考例の参照先を紹介しながら、策定の際に検討するとよい下記の項目を紹介する。これはすなわち実習受け入れの課題と言えるものである。

実習受け入れマニュアル・手引きの検討

- ・実習生が主体的に学ぶ実習
- ・養成校と園の保育や教育についての情報交換
- ・個々の学生の学習の進捗や課題についての情報交換
- ・学生にとってキャリア教育の機会であること
- ・学生の心身の健康に配慮すること
- ・養成校から園への実習に関するフィードバック
- ・受け入れ園の人材育成力に繋げること

最後にマニュアルには下記のような役割の明記を勧める形で実習担当者の重要性について伝える。

保育実習担当者の重要性

- ・実習の始まりから終わりまでの成長を見守る役
- ・モチベーションやストレスをケアする役
- ・実習生にとっての相談相手
- ・必要なフィードバックを小まめに与える役
- ・他の職員との情報を繋ぐ役
- ・養成校との情報を繋ぐ役
- ・園内の実習体制や人材育成を促進する役

7. 今後の課題

保育実習の充実のために実習担当者研修は重要なものであり、このような機会は今後増えてくると考えられる。研修自体が連携の場であり、貴重である。

今回の研修は研究結果を利用して養成校と実習園の連携の重要性を伝える基礎的なものとした。

今後、事前アンケートにもあった「養成校と実習園の連携の方法を知りたい」という声に答えられるようになるとよいと考える。実際のところ、この連携の仕組みを作るところが課題である。

次のような課題については、より具体的な研修や共同の検討の機会を持つことが望まれる。

- ・実習生の受け入れ体制について
- ・保育所実習指導の内容と指導法(日誌・評価・指導等)について
- ・効果的な保育所実習指導の方法

今回の研修のオンライン・オンデマンド期間が終了した後に、受講者には事後アンケートに協力いただく予定となっているので、受講者の意見を反映させて次の研修に活かしていきたい。

より効果的な実習指導の改善のために、各地域や団体において、研究会やワーキンググループのような形で養成校と実習園の担当者と継続的に議論を重ねて連携を深めていくような機会を作っていくことが望まれる。

そして、園での実習指導が園内の人材育成にも繋がるような機会として活かされることを期待している。

謝辞：研修講師の機会をいただきましたA市役所のご協力に心より感謝申し上げます。

【引用文献・参考文献】

保育実習実施基準（指定保育士養成施設及び運営の基準について）（平成15年12月9日雇発第1209001号）別紙
保育の現場・職業の魅力向上検討会（第5回）（2020）
保育士の経験年数、採用・離職の状況
今村麻子（2019）. 保育学科学学生が保育士として就職するまでのプロセス：複線径路等至性モデル（TEM）を用いた分析，日本産業カウンセリング学会第24回大会発表論文集，25
厚生労働省（2021）. プレスリリース新規学卒就職者の離職状況を公表します. 1

村上涼・今村麻子・伊藤妙子・戸田真・鈴木健史・藤枝充子（2019）. 自主シンポジウム：実習生受け入れのためのガイドライン作成の試み—園と養成校が協働して学生の育ちを支えるために—日本保育学会第72回大会発表論文集，65-66
村上涼（2020）. 保育士は実習をどのように捉えているのか—質問紙調査結果の分析から—，江戸川大学こどもコミュニケーション研究紀要Vol. 2. 11
村上涼・今村麻子・鈴木健史・江村綾野（2021）. 保育実習における保育士・実習生・養成校教員の認識のずれの可視化—インタビュー調査の分析から—，保育者養成研究所報告書（2021）保育士養成協議会. 73-76
日本保育協会（2021）令和3年度 オンラインセミナー実施要領（4. 保育実習指導者セミナー）. 8